

ダウンサイジングが進む社会の中で

西 慎一*

2024 年は雑誌「臨床透析」発刊 40 年目に当たる。このロングセラーは、本誌が常に透析医療スタッフに時代ごとの最新の話題を提供し、愛読されてきた帰結と思われる。

小生は 1983 年の医学部卒業で、まさに「臨床透析」創刊後に腎臓病学・透析医療学を学んできたことになる。どこの透析施設に行っても、この雑誌は医局や図書室に置いてあり、夜間アルバイトの合間によく読んだものである。実に幅広い話題やテーマが特集されており、透析医療の奥深さと難しさを感じてきた。医学のみならず、医工学・看護学・心理学・栄養学などの話題もあり、まさに全人的医療が透析医療に必要なことを痛感する糧であった。医師だけのための学術雑誌ではないという性格もこの雑誌の魅力であり、少しでも質の高い透析医療を目指す日本の透析施設多職種スタッフの知識の源泉となってきたのではないだろうか。

この 40 年間に末期腎不全患者の患者背景は大きく変化した。1980 年前半では、平均透析導入年齢は 50 歳代前半であり、2020 年を過ぎるとほぼ 70 歳に達するようになった。また、男性と女性の透析導入者数の差は開くばかりである。かつてはその差はなかったが、現在では男性：女性の比率はほぼ 2：1 である。男性高齢者が透析患者に多くなる傾向が今後も続くと予想される。しかも、独身の男性高齢透析患者が増えていくことが予想される。昨今の婚姻率はどの年齢層でも低下しており、生涯結婚しない人が増

* 服部病院腎臓内科

えている。また、今まで透析患者数は増加してきたが、流石にその増加速度も鈍り、いよいよ、日本国民の人口減少と同様に透析患者数も減少していくはずである。日本のGDPは少しずつ減少し、かつては世界第2位であったが、中国やドイツにも抜かれ4位に後退している。多額の医療費が必要な透析医療を支えるには、国民の総世帯収入が高いことが必要であるが、海外と比べ日本の世帯収入の伸びは低い。

ダウンサイジングが進む日本で透析医療を維持するには、コストダウンが必要であり、その努力を開始する時期ではないだろうか。透析液流量は患者体格ごとに調節し節約できないのか。少しでも安く、電気・水道代を透析医療では優遇してもらえないのか。大量に水を使用するHDFを、海外で検討されているメディウムカット膜を用いたHDに変えなくてよいのか。SDGsが声高にいわれる時代である。環境にも優しい透析医療も考えなければならない。世界的な原材料費や輸送費の値上がりに伴い、透析液や透析回路は今年も値上がりするようである。ダウンサイジングが進む日本社会の中で、「どうする透析医療」。